北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

2003年度 岩見沢校学士論文等概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9355

2003年度　岩見沢校学士論文等概要

〈学校教員養成課程〉

教育発達臨床系

学校教育　今年度は以下の14篇である。「学校教育における道徳教育」「こどもの自治的活動の可能性」「今、問い直される少年法～『改正』か、それとも『厳罰』か」「『創作劇』による地域教育の可能性を探る」「こどもと遊びにおける一考察」「生徒指導上の『懲戒』と『体罰』について」「漱石の教育観～執筆作品文中から「教え」を探る～」「少年犯罪、少年非行からこどもへの教育を考える」「変動期の教員養成～大学における教員カリキュラムを考える～」「特殊学級における英語教育に関する実践研究」「知的発達に遅れのある子どものコミュニケーションに関する一考察」「知的障害児の社会的促進に関する実践的研究」「統合保育における一卵性双生児の発達的変容に関する研究」「小集団場面における指導的介入に関する実証的研究」。

心理学　今年度は以下の10篇の論文が提出された。

「携帯メールにおける自己開示の変化と個人差特性の影響」「『書く力』を育てる『看図作文』指導法の検討」「小学生の女子にみられる化粧行動」「友達親子に関する研究」「罪悪感に関する研究」「恋愛関係の存続と崩壊」「低下した自尊感情回復のための援助行動の道具性」「大学生の失恋後の反応と立ち直りに関する研究」「D型及びU型を含む質問紙尺度作成の試み」「なぜ児童虐待は起きるのか」。いずれも実証的な研究である。

総合教育　総合教育第１研究室では「戦前期における戸塚廉の初等教育実践論」が、第２研究室では「民俗舞踊の教材化への提案　－中野七頭舞をもとに－」、「学校教育における『食育』のあり方を探る」、「総合型地域スポーツクラブの導入経緯と現状と定着への可能性についての検証」、「特別支援教育の導入における学校・教師のあるべき姿とその施策」、「危険なダイエットに陥らないための提言－10代若手女子ダイエットの現状から－」の５本の計６本が提出された。

社会・言語教育系

国語　近代文学６、国語学（＝日本語学）２、国語科教育１の計９篇の論文が提出された。そのうち、①『或る女』論、②武者小路実篤『友情』論、③『破戒』論、④日本語における待遇表現の研究、⑤西尾実の文学教育についての一考察の５篇がすぐれていた。①②は作品をていねいに読みこみ、叙述に即した論の展開が印象にのこった。③は瀬川丑松の告白＝謝罪の意味を、デュルケーム『自殺論』とからませて論じたユニークな論文である。④の待遇表現の研究は、先行研究を土台に自分なりの論をていねいにまとめている。自分で用例を採取した点は特筆に価する。⑤は難解といわれる西尾実の文学教育にかかわる論文を精読し、素読、解釈、批評、鑑賞の意味を考察したものである。例年のことであるが、指導教官の指導をきちんと受けた論文のほうが、論文としての完成度が高いということはいうまでもない。

書写教育　今年度は「唐の文化と顔真卿の書」という論文一編が提出された。唐という中国歴代王朝の中で最も書が盛んな時代にあって、中唐の顔真卿が残した足跡は大きい。その書が生まれた背景を探ると共に、日常の書活動の中で体験的に理解した事柄についての考察を行っている。

外国語　伝記や手記などを含む文学（10編）と英語教育（２編）を扱ったものが提出された。文学に関しては、女性の生き方、家族、人種問題、堕胎や性犯罪などが多く扱われた。文学でよく取り上げられるスタインベックなどの作品だけでなく、戦場のピアニスト、サイダーハウスルールやホビットの冒険などテレビで取り上げられたり映画化されている作品が取り上げられる傾向がみられた。学生の独自の視点から、それぞれの作品を研究し、深い考察がみられたものもあった。英語教育に関しては、awareness と記憶の保持という観点から、また、コミュニケーションタスクをする時の流暢さの測定に関わるものが扱われ、いづれも現代の英語教育に示唆することが多く、実践に活かす可能性が期待できるものであった。

歴史　本年度は、日本史分野三編、外国史分野三編の計六編の学士論文が提出された。日本史分野では「鎌倉初期北条氏執権権力の確立」、「幕末期京都における会津藩の動向－京都守護職の職制からみる考察－」、「『傍若無人』の政治家森恪－日中戦争とのかかわりを中心に－」がそれであり、外国史分野では「時間と自由」、「中世と近代の境界線の考察～ハプスブルク家を中心に～」、「ナショナリズム動員の歴史と教育」がそれであった。

日本史分野では、いずれも一次史料と格闘してそれぞれの論を見出していこうとする姿勢が見られ、一定の成果を得た。外国史分野では、各人の問題意識から出発したテーマを、近代ヨーロッパを題材に歴史的に考察した力作揃いで、重厚な論文に仕上がった。

法律学　今年も３名が卒論を提出した。「良好な職場環境の形成に関する一考察～日本国内におけるセクシュアル・ハラスメント裁判の分析及び検討」は、これまでに出されたセクハラに関する100件近い裁判例を分析・分類し、働く環境のあり方について考察を加えた論文である。すばらしい努力の成果を高く評価したい。「学習指導要領改訂の是非を問う」は、2002年度から実施されている現行の学習指導要領を中心に、学習指導要領の法規範性とその変遷を追い、今回の改訂の意義を考察したものであるが、学習指導要領そのものの存在意義に関して論じる等、もう少し掘り下げた議論がほしかった。「ストーカー規制法の真実～データから分析するストーカー規制法の効力と存在意義」も法的に深い議論はなされてはいないものの、実際のストーカー犯罪の概要を加えたことや事件数等のデータを扱ったことで危機感が伝わる論文となった。

社会学　本年度は、「農業と観光のまち美瑛町　――中山間地域のまちづくり――」ならびに「市町村合併と基礎的自治体のこれから」の２編が提出された。いずれも相当の力作であると考える。前者は、行政や自治体からのたんねんな聞き取りと諸資料の検討をもとに、観光目的の年間100万人規模の入り込みと豊富な農業・自然資源をもちながら、今後の地域振興の方途を必ずしも見出していないかに思われる美瑛町のまちづくりの現状と課題を、ニセコ町のそれと対比させながら描き出したもの

で、政策的な提起には問題を残すが、読み応えがある。後者も、現在進行中の市町村合併について、その政策意図や問題性についてたんねんな検討を加えたもので、資料的な価値ももつ。とくに、明治および昭和の「大合併」についての歴史的考察をふまえたことで、説得力を強めている。基礎的自治体の規模についての欧州の経験への言及も参考になる。

経　済　学　経済学では現在話題になっている経済的な事象がとりあげられた。第一は「アジアの発展と通貨危機」においてアジア通貨危機がマレーシア、タイ、韓国および日本に及ぼした影響が考察され、第二は「平成不況と不良債権」においては信用創造の観点から平成不況がとりあげられた。第三は「ケインズ学派と新古典派との対立」においてケインズ学派の特徴が考察された。三本とも現代経済にたいする関心から出発して興味ある分野が取り扱われ、三人とも現代経済の仕組みをそれなり理解できたのではないだろうか。

哲学・倫理学　今年度は、本校において長く教鞭をとられてきた本学名誉教授、阿部秀男先生の最後の教え子３名が卒業論文を提出した。学生たちは、個性と自主性を尊重する先生のご指導のもと、それぞれ関心をもつテーマについて主体的に研究を深めていった。「キリスト教に見られる死生観　～ロマ書を中心として～」は、丹念な聖書解釈によってキリスト教における「死と罪」の問題を明らかにしようとした意欲作である。「イスラーム～その発展の歴史～」は、2001年の同時多発テロに衝撃を受けた著者が、先入観にとらわれず自分の目でイスラーム世界とその世界観の成立・発展を跡づけようとした力作である。「ルソーの教育観、エミールにおけるルソーの思想」は、障害児教育に関心を抱いてきた著者が、大著『エミール』を手がかりに子供の発達とその教育のあり方を考察した労作である。

社会科教育　本年度の提出論文は４件である。「小学校における歴史学習の意義」は、実験授業の実施とその分析を通して調べて考える授業のあり方を追究したもので、杉田玄白を教材とする授業プランは現場実践に活用できる優れたものである。「サッポロビールの祖村橋久成」は、薩摩藩門閥に生まれた村橋の、英国留学、北海道開拓使麦酒醸造所の役人、辞職後に消息を絶って神戸の路傍で斃死する数奇な生涯を明らかにしたもので、地域に関わる人物の教材開発をめざした基礎的研究である。「江別市における住宅地の広がり」は、住宅地の造成によって創出される町名の変遷からベッドタウン江別の成立ちを明らかにしたもので、作成した地図資料は地域学習に活用できる。

「自然と環境、保護と保全」は、アメリカとイギリスの自然保護の思潮と実際をふまえ、日本の国立公園の成立における自然保護のあり方を考察したものである。

自然・生活教育系

数　　学　菅原ゼミ（幾何学）では、長野正著「曲面の数学」をテキストとして取り上げ、これを３名のゼミ生で輪講した。この本は曲面理論を通じて現代数学における多くの幾何学的手法について入門的な解説を行ったものとして、1968年の初版以来多くの人に読み継がれてきた名著である。ゼミではまず二次曲面の分類論から入ってアフィン変換と２次形式、曲線論のフルネーの公式について学習した。さらに微分形

式の理論を学ぶことによってストークスの定理を学んだ。これは現代的な多様体上の微分幾何学を学ぶ上で欠かせない重要なものである。さらにゼミでは曲面の微分幾何への入門として第1基本形式について学び、現代数学の様々な手法が曲面の研究にいかに有効であるかを学んだ。

佐藤ゼミ（解析学）では、長岡美香、林将亮、平中奈津子の3名で、コルモゴルフ・シュルベンコ・プロホルフ共著「コルモゴルフの確率論入門」を読んだ。

大森ゼミ（代数学）では、小林大介、野々村謙司、山影知美の3名で、石谷文夫著「代数学」を読んだ。

宮下ゼミ（数学教育）では、高橋謙介、松橋潤、村上由美の諸君とともに、数学教育でのディジタル・メディア活用を実践的に研究し、教材をいろいろ試作した。

物理学　本年度の卒業論文は6篇である。「雪結晶、積雪及び霜のレプリカ作製とその解析法に関する研究」（木村裕一）は、種々の雪に関するレプリカをコンピュータにより立体的に再現し、解析したものである。「MRI3次元データを用いた積雪の構造解析に関する一考察」（佐野哲史）は積雪の3次元構造をコンピュータで解析する際の閾値の敏感性や比表面積、粒子の連結性について考察を行ったものである。「過冷却水滴から成長する氷結晶の研究」（田代智昭）は、過冷却水滴を凍結させる実験を行い、社会的に話題となっている「水の結晶」の検証を試みた研究である。「雪結晶の顕微鏡カラー写真撮影法に関する研究」（長井　創）は、理科教材としての雪結晶のカラー写真を撮影する方法の開発を行ったものである。「平松式人工雪発生装置の原理と結晶の成長に関する研究」（山本頼門）は、理科教材として開発されたペットボトル人工雪装置の構造と結晶成長の特徴を研究したものである。「公害と環境教育の事例的研究－栗山の六価クロム公害を例として－」（西亦直明）は、環境教育を地域的な観点から展開するために栗山における六価クロムの公害を取り上げ、また、地球規模の環境破壊についても考察を行っている。

化学　以下の2件の卒業研究が報告された。

学部卒業

渡辺　啓二：伝導度測定回路の考察

奥山　　渉：硫酸銅5水和物の昇温実験

生物学　「篠津湖植物プランクトンの季節的遷移」（成田淳一）は、石狩川河跡湖である篠津湖（袋地沼）の植物プランクトン相を調べ、さらに現存量（クロロフィルa量）および主要種の季節変化を明らかにすることを目指したもの。現存量および主要構成種の変化から、浅い富栄養湖としての特徴がかなり明らかになった。

「藻類におよぼす光の影響－明暗周期と波長」（村井博貴）では、緑藻類2種および珪藻類1種を白色（蛍光灯）、赤色（LED）、および青色（LED）の連続光で培養し、成長に及ぼす影響が調べられた。3種ともこれらの連続光下で無性的に増殖したが、特にボルボックスでは有性生殖が発現せず、その後の実験から暗期の存在が有性化に必要であることがわかった。また、ボルボックスの走光性は青色光で現れ、赤色光、赤外光には反応しないこともわかった。

地学　2003年度の卒業論文は、石狩低地帯北部、当別町周辺地域の新第三系及び第四系の層序学的研究である。本研究の主要課題は、①海成更新統材木沢層の地質年代と

堆積環境、②新第三系と第四系の微化石の分析による年代決定、③調査地域周辺におけるマーカーテフラ（広域火山灰）の確認とそれに基づく広域的な対比である。

①については材木沢層から新たな貝化石産地を発見し、貝化石や有孔虫化石の解析により、古環境の変遷を明らかにした。②に関しては、主に珪藻化石の分析により、当別層の地質年代をほぼ確定することができた。一方、③については、第四紀後半の有効なマーカーテフラを確認できず、新たな知見は得られなかった。

以上、野外調査データーに多少不備があるが、室内作業で重要なデーターが得られ、当別町周辺地域の新第三系及び第四系の層序や年代に新たな知見を追加した。

理科教育　本年度は1）「厚岸湖の水質環境解析」；11地点の3年分の湖底底質サンプルから抽出された底生有孔虫の群集解析により水質環境を論じたもの、2）「更新世前期から中期の古環境と海水準変動」；瀬棚郡今金町字花石の珍古辺川流域に分布する瀬棚層上部（約100万年前）の23サンプルから抽出した底生有孔虫・浮遊性有孔虫の群集解析による堆積深度と海水温変動などについて考察したもの、3）「柱状節理の分布傾向とそのでき方」；札幌市東簾舞に分布する安山岩柱状節理の形状分布調査と小麦粉を使った形成過程のシミュレーション実験を扱ったもの、の3編が提出された。いずれも、将来の教材化をめざした基礎的科学研究であり、どのテーマも今後さらに発展できる可能性を持っていることがわかる興味深いものであった。内容的にもこれまで未解明だった多くの基礎データが記載されている点で重要なものと評価できる。

生活科学科教育　「障害者・高齢者のためのバリアフリー住宅に関する考察」（川上）は、障害者・高齢者の自立と家族の介護という観点から住宅について検討した。「児童虐待」（河原）は、要因や社会的取り組み等について調べ、問題点について考察した。「地球環境の変遷による影響と環境問題への取り組み」（川村）は、地球温暖化・酸性雨・砂漠化の原因および取り組み等について述べた。「カーリング愛好者の主観的価値観および生きがい感に関する研究」（徳垣）は、スポーツによる生活の質的影響を調査し、余暇活動の観点から生涯スポーツの意義を明らかにした。「川田龍吉と男爵いもとのつながり」（藤澤）は、男爵いもの普及に功績を遺した川田龍吉の生涯について調査した。

体育・芸術教育系

音　　楽　「音楽科教科書の歴史とその社会的背景に関する研究」「音楽教育におけるマルチメディアの活用－小学校音楽科教育実践例の検討を通して－」「小学校音楽科における鑑賞教材研究－教材選択と授業実践の再考－」「中学校における音楽教育の意義と創作指導に関する一考察」「年代別発達及び複式学級におけるわらべうたの研究」「日本の米国大衆音楽の受容～ジャズ・ブルースに関する一考察～」「金管楽器の歴史的構造発達とその奏法のしくみについて～金管楽器のアンブシャーの考察～」「コントラバスの歴史とその変遷～取り扱い方と奏法～」「ピアノ演奏について」「クララ・シューマの生涯と功績及びピアノ作品についての考察」「ショパンの生涯及びバラード第1番にみられる民族的要素についての考察」「ショパンの生涯と《ピアノソナタ　第3番》ロ短調　作品58　第1楽章の分析」。

美　　術　絵画は油彩２名。論文「ピカソ」は時代ごとのピカソの作品、例えば青の時代、赤の時代、キュビズムの時代とその後を比較し、その変貌について考察した。制作は油彩130号、油彩100号、水彩40号。もう一人は論文「ジャクソン・ポロック～その生涯～」ジャクソン・ポロックが現代絵画にもたらした影響をその生涯を探りながらの考察。制作は水彩130号、水彩100号、水彩10号。工芸は２名。それぞれ創作と論文。創作では共通テーマとして木組造形と自由なテーマ設定による作品一点ずつで、実用性と造形性の調和をはかり、それぞれの能力の限界に挑んだ力作。論文では「おもちゃから学ぶ」と「木工芸を通して学ぶことの意義」と題して、日頃から関心のある問題について論述した。

体　　育　今年度は体育科教育、スポーツ指導の課題、健康教育に関する内容の論文が９編あった。「大学スポーツ選手の勝敗に対する原因帰属について－オープンスキル種目選手を対象として－」（中村彰子）、「総合的な学習の時間における身体活動の可能性に関する一考察－岩見沢市内Ａ小学校における総合的な学習の時間の実践に焦点を当てて－」（洞口暁恵）、「小学校運動会における徒競走について－岩見沢市とその周辺の町における運動会の観戦者に焦点を当てて－」（山口耕昌）、「垂直跳び、たち幅跳びにおける３種類の跳躍方法に関する運動学及び動力学的研究」（石黒智志）、「農村地域におけるスポーツイベントに関する一考察－当別町の事例から－」（瀬戸貴裕）、「女子大学生のダイエット行動とセルフエコントロールスケジュールの関わり」（熊谷幸子）、「大学生の性意識および性行動に関する研究」（齋藤雅子）、「教育系大学生の健康状態と悩み及びストレス対処行動との関わり」（藤戸聡史）、「筋疲労回復を指標とした人工光線の急性的な影響について」（佐々木奨太）。

〈社会教育課程〉

社会教育コース・教育学グループ

「少年法の改正議論に関する一考察」（太田祐一）は、少年犯罪の凶悪化に対する対策としての厳罰化についてデータを用いて考察。諸外国との比較のうえ、厳罰化よりも、教育的対応のほうが有効であることを論証している。「内発的発展論に関する一考察」（小川健）は日本とイタリアの、内発的発展事例を考察。大企業によらずとも地域経済が住民の力によって発展する可能性をあきらかにした。「著作権問題にかんする考察」（北本雅和）はコンピューターソフトなどの著作権問題をとりあげた。コピーすることに対する罪悪感がまだ希薄な中で今後の教育課題を明確にした。「若者の低学力・就学問題と社会教育の課題」（佐々木祐介）は低学力問題の深刻化と若者の失業問題により「社会的弱者」になる危険を指摘。職業教育としての社会教育の重要性を明らかにしている。「２ちゃんねるにかんする考察」では、国内最大の書き込みサイト「２ちゃんねる」が作り出した若者文化のあり方を考察。「しない偽善よりする偽善」（アフガニスタンの学校建設）など、一般にいわれる「悪評」だけではない側面をあきらかにするとともにあらたなコミュニケーションの可能性をしめした。「高校生における自主的活動支援に関する考察」（徳田雅也）はボランティア活動をしている高校生がどのような支援を必要としているのかを明らかにした。どのテーマも現代的課題をとらえている。

社会教育コース・文化人類学グループ

今年度は、五十嵐郁美「現在の『清潔観念』に関する考察」、高橋宝子「教育におけるインテグレーションに関する考察」、吉田信「脳死臓器提供・移植の現状と今後の課題に関する考察」の3名が卒業論文を提出した。各自ともに当該課題について、その歴史的過程と現状の問題点を論じた。五十嵐は小学校教科書の分析を通じて、日本人の「清潔観念」がバブル経済期以降、他者への不快感の有無にその視点が移行したことを明らかにして抗菌グッズ他、清潔の流行が我々にもたらす危険性を指摘した。高橋は英国のインテグレーションの事例を検討して日本の場合と比較するとともに、障害者の「インクルージョン」教育への移行の可能性を探った。吉田は本学学生へのアンケート調査を行い、国内における脳死臓器移植が振るわない原因を、当該制度、脳死・臓器移植に関する教育普及活動等の観点からその問題点を明らかにした。

社会教育コース・地域環境学グループ

里村藤丸「地域開発の有効性とその問題点に関する考察～北海道を事例として～」：地域開発プロジェクトが、どのような政策によって進められ実行されてきたのかを、歴史的背景や北海道の事業を例に検討し、今後の地域開発プロジェクトの方向性や第三セクター等民活事業の手法についても指摘を試みた。しかし苫小牧東部開発と北海道エアシステムの事例の具体的考察が十分ではなく、その正否を判断する上でさらなる内容の検討が今後の課題である。

森野大樹「海岸侵食を巡る問題と課題」：海岸侵食に関わる問題を石狩湾沿岸という局所的な問題として捉えるのではなく、自然現象そのものに焦点を当てて、整理を進めた。さらに、侵食現象とその種類、また原因を各種資料によって調べ、考察を加えた。しかし、不十分な内容に終わったのは残念である。

社会教育コース・福祉グループ

福祉政策研究室からは、「年金制度が女性の就労に及ぼす影響についての研究」、「国民国家成立の特徴と近現代における社会問題との関係」、「家族と結婚とシングル単位社会の関係性について」の考察の3論文が提出された。

また福祉教育研究室からは、「高齢社会の地域生活支援とまちづくりについて」、「自閉症者の生活の質の向上に関する研究－地域での生活・就労に成功している事例より－」、「高齢者の施設介護についての一考察－回想を通して－」、「高齢者の生涯学習に関する課題－高齢者福祉センター利用者の調査から－」の4論文が提出された。

いずれも丹念な背景分析や実際の調査に基づく論文展開が行われており、高く評価された。

生涯スポーツコース・スポーツコミュニケーション分野

今年度は生涯スポーツの課題、スポーツ指導法に関する内容の論文が9編あった。「トーナメントからリーグへの移行にともなう指導者の指導方針とチームの変化について」(小松真二)、「サッカー、バスケットボール審判員の意欲・心理的側面の性差についての一考察」(長田ゆう紀)、「サッカーの試合中における指導者のことばがけと選手の心理的競技能力との関係」(橋本務)、「女性スポーツ指導者の現状－中学校・高等学校の部活動指導における事例研究－」(工藤千秋)、「スポーツ文

化の学習環境における一考察－単一型スポーツクラブにおける成員の変容に着目して－」(吉田岳史)、「バドミントンにおける練習方法の特徴と運動強度の一考察」(伊邊拓樹)、「垂直跳び、たち幅跳びにおける3種類の跳躍方法に関する運動学及び動力学的研究」(須貝鉱太)、「月経周期が母子内転筋の収縮特性ならびに疲労抵抗性に及ぼす影響」(大良友美、三木昌子、和田あゆ美)、「人工光線の継続照射による筋機能への影響」(安達周平、高村克徳)。